

しおんだより VOL.10



お薬を正しく使うことの大切さを改めて

よくテレビなどで、「最新の検査」とか「最先端ロボット手術」なんて言葉を目にすると、どうしてもそっちに目が行ってしまいますよね。もちろん、最新の検査機器を使って普通は見つからない病気を早期に見つけることができたり、ロボットを用いることで、今までよりも小さな創で、しっかりと手術ができたりすることは素晴らしいことです。

しかし、検査も手術も実は治療のほんの始まりでしか過ぎません。ほとんどの病気は、検査や手術が終わったあと、場合によっては何年も薬による治療が行われます。そして、薬には、他の治療法にはない重要なポイントがあります。

それが、薬は飲まないと効かない、ということです。当たり前のことなのですが、意外に、きちんと飲めていないことがあるのです。患者さんが、自宅で薬を自分で調節したりして服用していると、効果が出なかったり副作用が出たりしますが、医師はこれらの症状も病気によるものと考え、新しい薬を出してしまうことがないとは言えません。

これらの問題を解決する専門職が薬剤師であり、当院でも病棟ごとの担当薬剤師がお薬をお渡しするまでではなく、服用後までフォローしながら活躍しています。

当院ハートチーム回診の様子。薬剤師も同行し、医師や看護師、理学療法士とも意見を交わし、治療を進めています。

褥瘡（床ずれ）の治療にも薬剤師が積極的に参画

高齢化の進展で、在宅・入院を問わず、気をつけていても褥瘡（床ずれ）ができることがあります。褥瘡の治療は、この数年で大きく進歩しましたが、身体の特定の部位に体圧がかかりつづけないようにしたり、栄養状態をよく保ったりすることとともに、その時々褥瘡の状態に応じた薬を適切に使っていくことが必要です。



当院では、薬剤部のメンバーが積極的に褥瘡の治療に参画。主治医の他に、天下茶屋・あみ皮フ科クリニックの山田先生にも診察していただきながら、日々の処置や、適切な体位の保持などを看護師と協力して行っています。

薬剤師自身が、創部の状態を見ながら、日々の薬物治療のサポートをする。そんなチーム医療による褥瘡の治療が行われています。

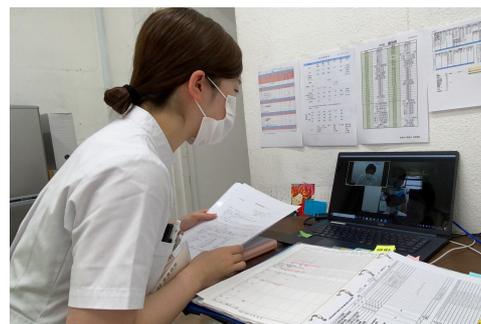
地域医療連携の現場でも重要な役割を果たす

当院に入院される患者さんの中には、在宅や介護施設で少し体調を崩されてこられる方もいらっしゃいます。

そのような方が、入院前にどのような薬を飲んでいるのかは、お薬手帳や医師からの紹介状を見ればわかることがあります。最新のものとは限りませんが、最近の状態変化がわからないことも少なくありません。

在宅や介護施設で調剤や服薬指導を担当している薬剤師と病院で担当する薬剤師が、治療の方針や最近のできごと、さらには、そういった症状変化と薬の関係について専門的な立場から情報を共有することは、患者さんの薬物治療がきちんと継続されるためにも大切なことです。

また、入院して治療が一段落した後、やはり介護が必要な方も増えている今、退院後の調剤を担当する薬局薬剤師に、病院薬剤師から入院中の症状経過や処方内容の変化などをお伝えすることで、退院後の薬物治療がきちんと継続して行えるようになります。薬剤師は、地域医療の現場で求められる連携について重要な役割を果たしているのです。



在宅や介護施設に訪問する医師や薬局の薬剤師と、薬剤や患者さんの情報を連携しています。

しおんだより 第10号 発行日：令和3年8月15日

発行人：狭間研至 発行元：医療法人嘉健会 思温病院

☎557-0034 大阪市西成区松1-1-31 電話06-6657-3711 HP: www.shion-hp.or.jp